

モエレ沼公園

北海道札幌市東区
札幌市営地下鉄東豊線「環状通東駅」からバスで25分

Moerenuma Park

資料提供: モエレ沼公園管理事務所

時とともに横たわる大地の彫刻

モエレ沼。石狩川水系が石狩低地帯に残した三日月湖である。アイヌ語の「モイレ・ベツ」(流れの遅い川)から来ているという。湖面に囲まれた広大な空間は、1960年代までは牧草地であった。

昭和54(1979)年、札幌市内から出される大量のゴミを処分するための空間として使われることになる。その後、処分場の閉鎖までに、270万tもの廃棄物がここに埋め立てられることになる。

しばらくして、札幌市が「環状夢のグリーンベルト構想」をまとめた。札幌市街地を公園や緑地など8つの緑地帯で包み込もうという雄大な構想であり、札幌における都市計画の中に黎明期から一貫して流れている、オープンスペースネットワークの思想がその背景にある。その中でモエレ沼は、北部平地系緑地の拠点として位置づけられていた。

昭和57(1982)年から、ゴミ処分場として稼働させつつ、一部で公共工事の建設残土による公園造成工事が始められることになった。この段階で、公園整備計画の内容はごく普通の都市公園のものときほど変わらないものであった。

縁あって世界的彫刻家イサム・ノグチがこの地を訪れたのは、昭和63(1988)年3月のことである。彼はこの広大なゴミ捨て場を見るなり気に入り、公園のデザインを引き受ける。

同年5月ノグチは、彼が長年温めてきた構想を形にした3000分の1の模型を携えて札幌に戻ってくる。そこには、大地の彫刻が地形となって表れていた。6月には2000分の1の模型ができ、11月には香川県牟礼町のノグチのアトリエでこの模型による構想の最終調整作業が行われた。

12月30日、ノグチ急逝。享年84。ノグチがモエレ沼公園に関わったのは、わずか9ヶ月であった。



ゴミ処理場として使用されていた当時のモエレ沼



植樹によって作られた森



グランドオープン後のモエレ沼公園



モエレ山の冬を楽しむ人々



初秋のモエレ山



冬のモエレ山

このあと、ノグチの残した模型と言葉を手掛かりに、設計事務所アーキテクトファイブと札幌市による手探りの公園づくりが始まる。

平成8(1996)年、プレイマウンテン完成。平成16(2004)年、モエレ山完成(標高62.4メートル)。完成済みの設備から順次市民の利用に供され、平成17(2005)年7月1日、グランドオープンを迎えた。ノグチの死から17年の時間が流れていた。

かつて膨大なゴミによって埋葬された大地は、一人の彫刻家が人生の最後にかけて魔法によって、壮大な環境彫刻として再生された。建築家の内藤廣は、この公園を「汚された大地への鎮魂と未来を託す子供への希望」と表現している。

カラマツ、アカエゾマツ、ハルニレ・・・園内の木々は毎年着実に成長している。定められた園路とは別のところに、いつのまにかケモノ道ならぬヒト道ができていく。市民に使われているなよりの証だ。時間の流れと人の営みがこの公園を育てていく。

平成14(2002)年グッドデザイン大賞受賞。平成19(2007)年公益社団法人土木学会デザイン賞最優秀賞受賞。(樋口 明彦)

岩見沢複合駅舎

北海道岩見沢市
JR函館本線「岩見沢駅」構内

Iwamizawa Station

協力: 北海道旅客鉄道株式会社 資料提供: 株式会社ワークビジョンズ

まちの顔としての駅舎

牛舎風のマンサード屋根が特徴的だった先代の岩見沢駅舎は、道内で由仁駅(平成18(2006)年に解体撤去)に次ぐ古さをもつ木造駅舎で、昭和8(1933)年の改築以来岩見沢市民から永く愛されてきた建物であった。しかし、平成12(2000)年12月10日の火事で全焼してしまう。

JR北海道では、新岩見沢駅のデザインを、一般公募型のデザインプロポーザルで選ぶことにした。全国のJRグループ初の試みであった。コンペでは、「まちの顔となり、変わらない価値を持つ駅舎」、「地域文化を担い、地域の交流拠点となる駅舎」が求められた。

376件という多数の応募作品の中から選ばれたのは、東京大学工学部土木工学科出身の西村浩の提案である。

そこにはデザイナーのエゴや屁理屈は微塵もない。かつて鉄道の町として栄えた岩見沢の歴史と記憶に謙虚に向き合い、同時に岩見沢の未来への希望を質実にかたちにまとめ上げた端正な駅舎だ。

正面窓枠に控えめに用いられている古レールは鉄道の町として繁栄した時代の証なのだろう。建物基壇の擁壁に据えられた4777個を超える刻印レンガは、岩見沢市民をはじめ各地の人々が新駅舎への思いを込めて寄贈したものである。

そう遠くない昔、駅舎とはまちの顔であり、まちの賑わいの核であり、まちのプライドであった。そこに暮らした人々すべての記憶に残り続けるノスタルジーの風景であった。

しかし最近では、駅舎らしくない駅舎が幅をきかせている。収益性や経済性ばかりに注意が向けられ、このまちの駅はどんな顔をしているべきか、という大切な視点が忘れられてしまった。こうした状況に疑問と悲しみを感じている人は、決して少なくないように思う。

新岩見沢駅は、駅舎とはどうあるべきかについて、静かに我々に問いかけている。

平成21(2009)年、グッドデザイン大賞受賞。平成22(2010)年、日本建築学会賞受賞。(樋口 明彦)



地元大学生によるミニコンサートセンターホールで定期的に開催されている。



駅の南北をつなぐ自由通路



焼失した先代の岩見沢駅舎



シンプルにまとめられた内部空間
駅としての機能に加えて、市民ギャラリーなど様々な「まちの空間」、「市民の空間」が巧みに組み込まれている。



新しい岩見沢駅の正面。北の大地にふさわしい簡潔で伸びやかな表情を見せている。



基壇のレンガは多くの人々からの寄付による。その上には古レールが窓枠のアクセントに用いられている。